

表2 除去される放射性セシウムの割合(推定)

部位	枝条量	表面からの除去部位
浅刈り	17%	0～5cm
深刈り	36%	5～10cm
中切り	75%	10～30cm

○ チェルノブイリ事故後のトルコ紅茶からの考察

1986年4月に発生したチェルノブイリ原子力発電所の事故後、放射性物質は4月30日に約1,300km離れたトルコの西部（イスタンブールと黒海西部）に、黒海東部は5月2日に到達し、その後5月7～9日に黒海東部に降雨があり、農作物に放射性セシウムが飛散しました。トルコの東部は、紅茶の産地であり、この雨は一番茶収穫直前にあったため、一番茶新芽は放射性セシウムが付着して、その後の雨による汚染の浄化の機会もないまま、収穫されたと考えられています。

その後の年次経過は、表3のとおりで、この傾向は、今回の福島原発の影響も同様と考えられ、新たな放射性物質が降下しない限り、年々減少するものと考えられます。

表3 チェルノブイリ原発事故によるトルコ紅茶への放射能の影響

調査サンプル	セシウム含有量 (ベクレル/kg 製茶)	1986年一番茶(製茶) に対する割合 (%)
1986年 一番茶 最大値	30,000	100
1986年 二番茶 最大値	15,000	50
1986年 三番茶 最大値	10,000	33
1987年産(翌年) 最大値	2,014	7
1989年産(3年後) 最大値	777	3

※トルコの茶研究機関より野菜茶業研究所への私信として情報提供